

# 大学公開講座にみる成人学習者の特徴

## —— 筑波大学公開講座を事例として ——

手 打 明 敏<sup>\*\*</sup>

安 藤 耕 己<sup>\*\*</sup>

Features of Adult Learners in University Extension Courses:  
Case study on University of Tsukuba

Akitoshi Teuchi

Koki Ando

本研究は、筑波大学が実施している大学公開講座を対象として、成人受講者の特徴を解明し、そこにどのような課題があるかを究明することを意図している。

受講者分析からリピーター層（3,097人）の存在を確認できた。このリピーター層のうち平成8年と10～12年度の4年間で5回以上受講している成人リピーター24名の受講パターンを見ると、剣道か弓道の受講者に限られる「スポーツ教室単一科目受講型」、スポーツ教室を中心に、若干の他教室を受講している「スポーツ教室中心型」、異なる分野の教室を複数受講する「多角型」、そして「芸術教室中心型」といえるタイプが見受けられた。

今後は、このリピーター層がいかなる価値観や学習要求に基づいて受講科目を選択しているか等について、ライフヒストリー法をはじめとする質的な研究方法をもちいて詳細な分析をおこなう必要がある。

## I. 大学開放の現状と公開講座研究の課題

### 1. 1970年代以降の大学開放の展開

我が国の大学開放は、生涯学習政策が本格的に展開する1970年代以降明確な形をとって展開されるようになったといえる。昭和46(1971)年の中央教育審議会答申では、高等教育の開放性を高める観点から、再教育のための受入体制の充実、

---

※筑波大学教育学系

※※筑波大学大学院教育学研究科

一般社会人が履修しやすい形態の教育のための工夫，放送大学構想の具体化等の必要性が指摘されている<sup>41)</sup>。

昭和56(1981)年の中央教育審議会答申は，主として成人教育との関わりでこの問題を取り上げ，「成人への高等教育の開放」<sup>42)</sup>において，大学教育の開放の形態として，正規の教育課程とともに，聴講生・研究生制度の積極的活用，公開講座の拡充といった正規の教育課程以外の開放の必要性を指摘している。また，この答申では放送大学の早期実現の必要性が提言されており，この年の7月に放送大学学園が設立されている。

1990年代に入り，社会の生涯学習化に対応する大学の動きが活発となる。たとえば，社会人特別選抜制度，大学院の入学資格の弾力化，昼夜開講制等の正規課程への社会人の受け入れの拡大，正規課程以外では科目等履修生制度等がある<sup>43)</sup>。また，こうした動きを受けて，平成8(1996)年の生涯学習審議会答申「地域における生涯学習機会の充実方策について」では，すでに大学の公開講座が十分おこなわれているにもかかわらず，生涯学習の機会増大の方法として，さらに公開講座の拡充が望ましいと提言されている<sup>44)</sup>。

表I-1に示したように大学開放事業の中で，実施大学数と受講者数が最も多いのが「大学公開講座」である。大学公開講座は，大学が有する専門的，総合的な教育機能を社会教育面に活用して，人々の生活上，職業上の知識，技術及び一般的な教養を身に付ける学習機会を提供するものであり，地域における生涯学習の機会の一つとして無視し得ない役割を果たしているといえる<sup>45)</sup>。1970年代以降の

表I-1. 高等教育における生涯学習の推進(平成10年度)

形 態	実施校数	入学者数
社会人特別選抜(学 部)	319 (44)	5,243 ( 943)
同 (大学院)	240 (77)	7,204 (4,049)
科目等履修生 (学 部)	503 (87)	12,948 (3,575)
同 (大学院)	192 (60)	2,334 ( 644)
放 送 大 学	1	87,065
大学公開講座	549 (97)	750,196 (55,020)

註

○「大学等における生涯学習の推進について」(『第13回大学開放の在り方に関する研究会・第7回生涯学習実務者協議会』平成13年10月)より作成。

○放送大学については平成13年度第1学期現在のデータ。

○カッコ内は国立大学。

大学公開講座の開設状況を示したのが表 I - 2 である。大学公開講座は昭和52 (1977) 年度には162大学で実施されていたが、平成9 (1997) 年度には549大学に増加し、受講者も81,000人から643,436人とこの20年間に8倍も増加したことになる。

## 2. 大学公開講座に関する先行研究と研究課題

大学公開講座を実施する大学が顕著に増加するようになる1980年代に入って、大学公開講座を対象とする研究が散見されるようになる<sup>④</sup>。ここでは、その中で主要な研究を通して大学公開講座研究の動向を概観することにした。

田中雅文は、文部省大学局編「大学資料」の1980年代初頭までのデータをもとに大学公開講座のマクロ的動態分析をおこなっている。田中は、「大学公開講座によって教育・研究の成果を市民にも還元することは、大学が地域全体の教育機関として根づいていく上で大変意義深い」<sup>⑤</sup>と評価しているが、「現時点では地域の生涯教育機関としての機能を、大学公開講座は十分果たしていない」と指摘している。

表 I - 2. 大学公開講座の開設状況

年 度	全大学数	開設大学数	開設講座数	開設時間数 ／1講座当	受講者数
昭和52(1977)	431 (88)	162 (64)	684 ( 322)	27.5 (26.0)	81,000 (20,000)
昭和55(1980)	446 (93)	245 (72)	1,277 ( 381)	23.0 (24.4)	148,000 (26,000)
昭和61(1986)	465 (95)	338 (87)	2,511 ( 654)	15.5 (21.9)	330,486 (39,043)
平成 2 (1990)	507 (96)	391 (93)	3,173 ( 771)	14.9 (20.8)	426,650 (45,100)
平成 7 (1995)	565 (98)	501 (95)	8,236 (1,094)	—	639,723 (52,153)
平成 9 (1997)	586 (98)	549 (98)	10,086 (1,243)	—	643,436 (56,324)

註1 昭和52年度と55年度のデータは田中雅文「大学公開講座の動向」(日本生涯教育学会年報第3号所収)による。

註2 昭和61年度と平成2年度のデータは、「大学資料」第107・108合併号と119・120合併号による。

註3 平成7年度と9年度のデータは、文部省生涯学習局生涯学習課『大学等における生涯学習の推進』(平成11年10月)による。

註4 昭和55年、平成7、9年の全大学数は平成11年度『わが国の文教施策』p. 502。

註5 カッコ内は国立大学の開設状況。

田中雅文の研究が全国データを用いてのマクロ分析であったのに対して、福岡県下の48大学・短期大学を対象とした地域レベルの大学公開講座の調査研究をおこなったのが小池源吾「大学開放の現状と課題」<sup>(9)</sup>である。小池は、公開講座は大学に集積された教育資源を広く学外者にもたらそうとする企図において、「大学の開放事業のうちでも重要な意義を有する」<sup>(10)</sup>と指摘している。公開講座研究の課題として、小池は公開講座における教育、とくに教育の質 (Quality) の面と公開講座が大学機構の中でどのように位置づけられているか、つまり教育、研究に次ぐ「第3の機能」の制度化を分析視点に据えた実態把握が必要であると指摘している<sup>(11)</sup>。

1990年代になると、生涯学習政策の展開を受けて大学開放は多様な形態をとまって実施されるようになった。大学公開講座に限定してみると、表I-2に示したように平成9年度にはわが国の約9割の大学で公開講座が開設され、のべ64万人にのぼる受講生が記録されており、大規模なカルチャーセンター型から単発講演会型まで多様な講座が開設されるようになった。このような状況について藤岡英雄は、「公開講座はいまや大学の生涯学習対応の一形態として定着してきた感がある」と指摘している<sup>(12)</sup>。しかし、一歩ふみこんでそれがどのような理念のもとに実施されているかとなると、必ずしも明確ではないと藤岡はみている。藤岡の主要な関心は、大学公開講座を受講している学習者に向けられている。それまでの大学公開講座研究が、公開講座開設数等の全国的時系列的マクロ分析や講座プログラムの分析等の講座内容に関する研究であったり、大学公開講座の大学内での位置づけに関する制度研究であったのに対して、藤岡によって本格的な受講者分析の端緒が開かれたといえる。

藤岡によれば、徳島大学大学開放実践センター開設後10年余りの間に起こった特徴的な現象の一つは、受講者の固定化である<sup>(13)</sup>。平成8年度の受講者を見るとその半数以上が受講経験者で、22%は過去5年間において4年以上の受講経験をもつ「常連」である。藤岡はこの「常連」層（固定受講者）についての統計データ分析から、彼らは「自己実現型」学習者であると指摘している。藤岡は、こうした固定受講者がなぜ公開講座を受講し続けるのかを解くかぎは「生活者」としての彼らの「学習」の意味を個々のライフヒストリーの中に位置づけて理解する必要があると研究課題を提起している<sup>(14)</sup>。

以上、これまでの大学公開講座を対象とした研究動向を見ると、生涯学習支援という観点から大学公開講座の意義や大学機構の中で位置づけが検討され、ど

のような課題があるかが明らかにされている。今後、深められなければならないのは、大学公開講座を受講している学習者はどのような特性をもっているのか、また、彼らの学習ニーズはどのような特徴をもっているのか、そしてそうしたニーズに大学側はどのように応えているのかについて、マクロレベルとともに、個別大学ごとの詳細な分析をおこなうことである。

### 3. 本研究の課題と方法

本研究は個別大学の事例として、筑波大学が実施している大学開放事業のうち、1974(昭和49)年から今日まで継続して開設している大学公開講座を対象として、成人受講者の特徴を解明し、そこにどのような課題があるかを究明することを意図している。このことを考察することには次のような意義があると考えられる。

一般的にみて大学公開講座には、「大学が保有する高度な学問成果の公開という色彩が強く、地域の生涯学習ニーズにそのまま即応しているとは限らない。それは、その内容および方法において大学がイニシアティブをとる、あくまでも大学主導の生涯学習支援活動である」という制約があることが指摘されている<sup>(14)</sup>。このような制約があるにもかかわらず、大学公開講座に参加している成人学習者を研究対象として取り上げるのは、なによりも大学開放事業の中で最も普及しているのが大学公開講座であり、かつそこに参加する成人学習者の人数も他の大学開放事業に比べて最も多いということである。つまり、学習者の観点からいえば、大学公開講座は大学開放事業の中でも最も接近しやすい事業であり、それゆえ多様な学習動機をもつ学習者が参加していることが考えられる。しかも学習内容として趣味・教養を中心として開設されている大学公開講座の現状から考えて、大学公開講座受講者は地域の社会教育・生涯学習事業の参加者層と重なっていることが十分に考えられる。言い換えれば、提供されている学習内容が類似していることからみて、成人学習者は何らかの判断基準に照らして大学公開講座と地域の社会教育・生涯学習事業を区別して利用しているとも考えられるのである。それゆえ、彼らがどのような動機から大学公開講座を学習の機会として選択したのかを探ることは、地域の社会教育・生涯学習機関が提供する学習機会とは異なる、大学公開講座が地域社会で果たしている独自の役割を解明することになると考えられる。

## Ⅱ. 筑波大学公開講座の展開過程

### 1. 開学時の構想

筑波大学の公開講座は、筑波大学開学の翌年、昭和49年度より実施されている。昭和55(1980)年の段階では、国立大学開設の公開講座数のおよそ20%を占め、大学公開講座の先駆的立場を占めていたといえる<sup>(19)</sup>。

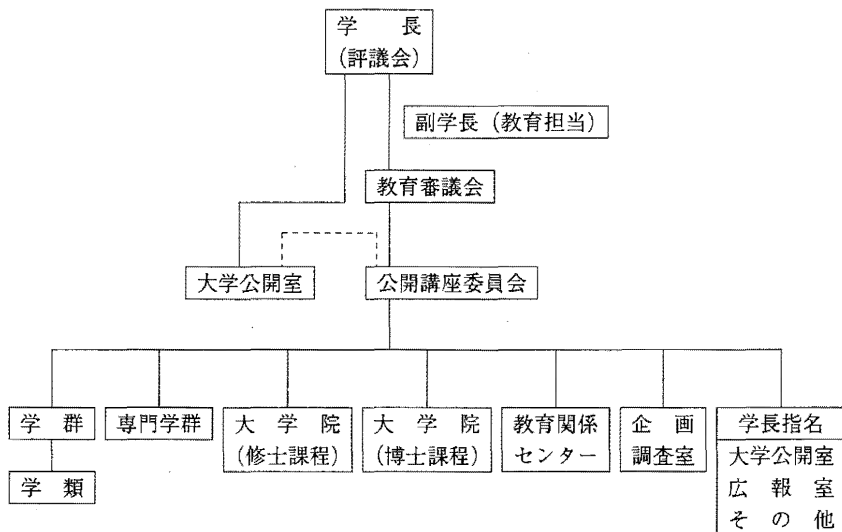
『筑波大学の基本構想』〔筑波大学1980〕には、「国内的にも国際的にも開かれた大学である」<sup>(20)</sup>ことを基本的性格とした筑波大学の建学の理念に基づき、「本学は、その本来の目標を達成するための活動とともに、教育及び研究に関する社会の多様な要請にできるだけ対応するものとする。そのために、教育・研究施設の共同利用や開放、更に教育・研究の成果を社会に還元するための大学公開講座を積極的に推進する」<sup>(21)</sup>ことが挙げられている。また、初代の大学公開室長であった江口篤寿によると、「地域に対する大学公開講座は、この理念に沿って地域の文化向上に資するために、地域住民に大学の教育・研究の成果を公開し、その教育・研究の諸施設・設備の利用に供することにした」<sup>(22)</sup>のであり、「地域の文化の活性化の原動力としての大学の役割が期待され」<sup>(23)</sup>るものであった。

このように、筑波大学における大学公開講座の当初からの方向性は「地域」に向いていたことが明らかである。公開講座開始後には、「開かれた大学の機能は、その効果を地域レベルに留めず、全国レベルや国際レベルまで及ぼす必要」<sup>(24)</sup>があるとし、出版活動への展開も検討された時期があったが、結局は実施されていない。

### 2. 開学後の公開講座と担当組織

筑波大学公開講座は、「開かれた大学」の構想に基づき、今日まで開講されている。その講座の種類に関しては、一般公開講座と特別公開講座、そして現職教育講座がある。一般公開講座は、平易な各種の公開教室及び公開講演であり、特別公開講座は、主として専門的な科目についての授業の一環として実施され、修了者には試験のうえ所定の単位を与えることとなっている。現職教育講座は、法令に基づき、教員その他特定の職業に従事している者等の再教育を目的として実施されるものである。

公開講座の運営組織としては公開講座委員会が挙げられる。組織は、学内各部局から選出された任期2年の24名のメンバーで構成されている(図Ⅱ-1)。開講時から既に30年が経過しているが、公開講座の運営組織に基本的な変化はみら



図Ⅱ－１．筑波大学における公開講座の運営組織

(筑波大学公開講座委員会編 『1980年代の生活と開かれた大学—筑波大学の生涯教育へのこころみ—』大蔵省印刷局 1982 p.22の図より作成)

れない。今日、26の国立大学に生涯学習教育研究センター等の大学開放組織が設置され、専任教官と事務職員を配置して公開講座等の大学開放事業を実施している。この現状を鑑みるに、筑波大学公開講座の運営組織は抜本的な見直しが必要であると思われる。

### Ⅲ．筑波大学公開講座受講者の分析

#### 1. 受講者の特徴

それでは以下、筑波大学公開講座における一般公開講座・特別講座・現職教育講座の中で、地域住民を対象とし、かつ最も受講者が多い一般公開講座を対象とし、公開講座の受講者の特徴を明らかにしたい。

まず表Ⅲ－１は、1999年度に開設された現状の公開講座の一般公開講座の内容を「スポーツ教室」「芸術教室」「その他の教室」に3分類して作成したものである。公開講座初期の内容と比較してみると、初期においては「スポーツ教室」(1979年度28講座→1999年度15講座、以下同じ)・「芸術教室」(10講座→8講座)

表Ⅲ－１．平成11(1999)年度 筑波大学一般公開講座における実施講座名

公開講座名	講座数	実施講座名
スポーツ教室	15	弓道①・剣道①(春季), 弓道②・剣道②(秋季), ゴルフ(初級), ゴルフ(中級), スクーバダイビング, ウォーキング講座, ゴルフ(アドバンスドコース), 少年柔道(一基本から応用まで), ミニハンドボール, バレーボール, ラグビー, サッカー, バドミントン
芸術教室	8	日本画(基本コース, 応用コース), 陶芸(初級・中級・上級), かな古筆を見る, 油絵(初級・中級), 塑像制作(頭像)
その他の教室	14	園芸教室(花・野菜・ブルーベリー), 健康と東洋医学, 臨床人間学, 生活の中のカウンセリング, 楽しい江戸探検, 親と子の森林教室(八ヶ岳演習林), 海洋生物の発生・生理・生態, 高原の自然観察, 民話・民間信仰, インターネットとマルチメディア, さまざまな生物学, 点字楽譜の基礎と実践, 秋の夜古典に親しむ

※筑波大学企画調査室編・発行『筑波大学年次報告(平成11年度版)』2000 p.374の表より作成

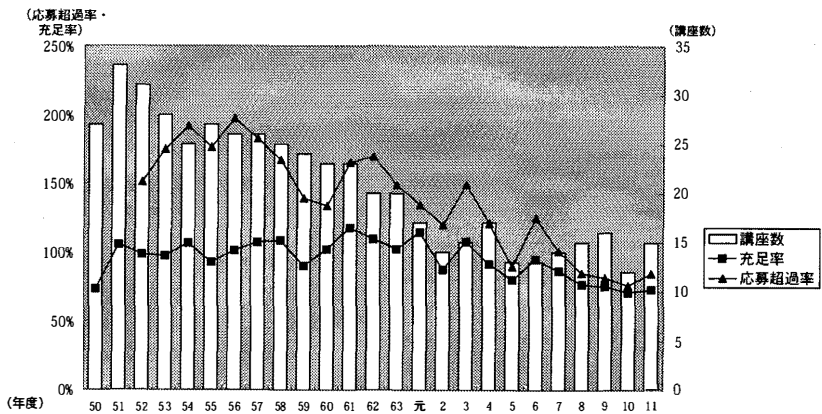
中心であったが、今日では「その他の教室」(4講座→14講座)が次第に増加している。

公開講座における講座数の推移、応募状況等についてみると、「スポーツ教室」(図Ⅲ－１－１)と、「その他の教室」(図Ⅲ－１－３)に、応募超過率(応募者数/受講者)と充足率(受講者数/募集定員)の低下が見られる。また、「芸術教室」(図Ⅲ－１－２)には常に高い応募超過率が見られることがわかる。しかし、全体としてみると応募超過率と、充足率が低下する傾向にあるといえる。

この傾向に関しては、近年の生涯学習振興施策により、社会教育・社会体育関係の施設の充実とそこにおける事業が充実してきたことが要因として挙げられる。しかし、その中で芸術教室において安定した応募数が見られ、定員の充足がなされているのは、筑波大学が芸術専門学群を持つことにより、公民館等の事業と比して高度な知識と技能の習得が期待されるゆえと推測される。一方でスポーツ教室をみると、応募超過率と充足率が低下している。体育専門学群があるのにも関わらず、このような傾向が生じているのは、芸術教室がレベル・習熟度別に講座が分けられているのに対し、スポーツ教室にはその傾向が少ないため、初心者に敬遠される傾向があることが推測される。

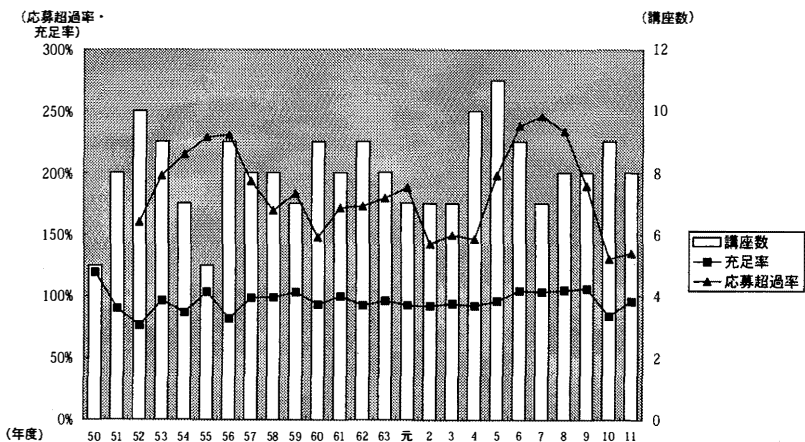
受講者の居住地域をみると、図Ⅲ－２－１からは、市内外の受講者がほぼ半々





図Ⅲ-1-1. 応募超過率と充足率・講座数の推移 (スポーツ教室)

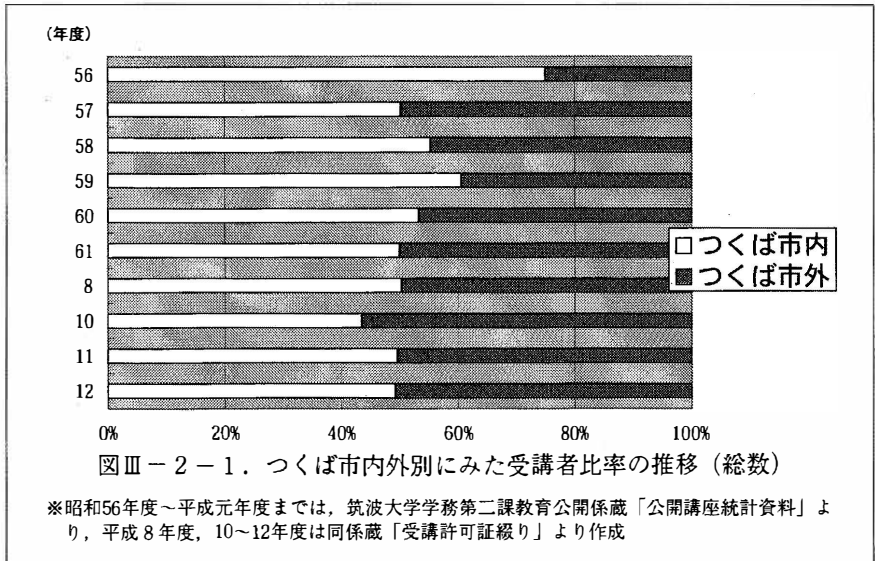
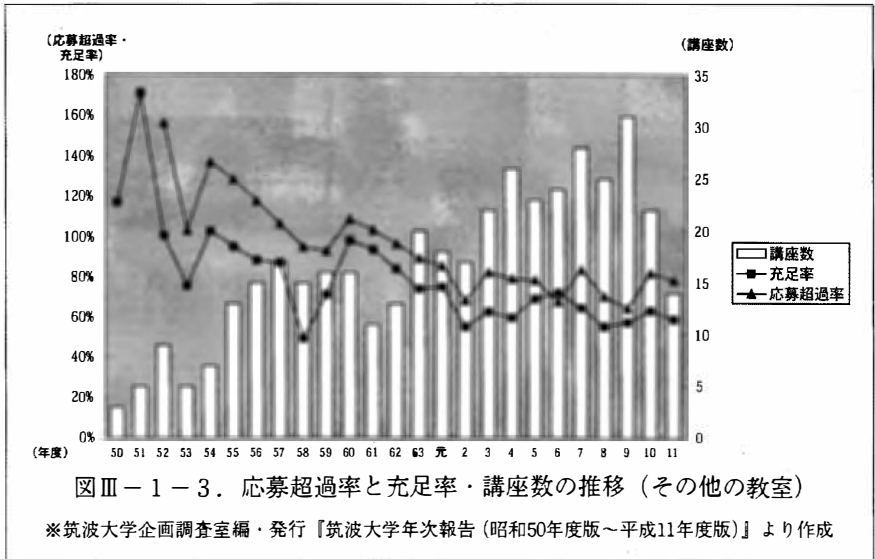
※筑波大学企画調査室編・発行『筑波大学年次報告(昭和50年度版～平成11年度版)』より作成



図Ⅲ-1-2. 応募超過率と充足率・講座数の推移 (芸術教室)

※筑波大学企画調査室編・発行『筑波大学年次報告(昭和50年度版～平成11年度版)』より作成

で推移してきたことがわかる。図表では示さないが、つくば市<sup>(2)</sup>内では、旧桜村域から旧谷田部町域の学園都市域が、常に受講者の8割前後を占めている。つくば市内においては、公開講座の内容がやや高度で、学園都市部の高学歴層の興味



関心と合致する傾向性を持つこと、また公開講座の開講情報が大学を研究機関の関係者が掲示板等で入手しやすかったことが要因であると考えられる。受講者は

全体として筑波大学より30km圏内に集中している。これは自家用車で1時間以内で通える立地条件と関わっていることが推測される。さらに、受講者を年代別・性別に見ると、20代から50代までの年代において、女性が占める割合が全体の7割以上であった。

## 2. リピーターの存在

公開講座受講者のうち、複数年度にわたって同一講座または別の講座を複数回にわたって受講している、いわゆるリピーターはどの程度存在しているのであろうか。ここでは資料上の制約から、平成8年、10～12年の4年間で3回以上の受講をしている受講者をリピーターとして定義することにした。平成8年、10～12年度の受講許可証綴りのデータ(3,097人)によれば、表Ⅲ-3-1に示したように、最高9回を始め、233人のリピーターが存在する。その中から4年間で5回以上の常連的リピーターとでもいえる受講者28名を抽出し、受講者の地域別分布を示したのが、表Ⅲ-4-1である。28名の居住地が市内外半々であることから、大学からの距離に関わらず、何らかの積極的な意志を持って講座に継続的に通っていることがうかがわれる。

さらにこの28名のうち、学生を除いた成人学習者24名の受講パターンを表Ⅲ-4-2に見ると、剣道か弓道の受講者に限られる「スポーツ教室単一科目受講型」(表Ⅲ-4-2中のD・E・J・M・Q以下同じ)、スポーツ教室を中心に、若干の他教室を受講している「スポーツ教室中心型」(A・C・O・S・Y)、異なる分野の教室を複数受講する「多角型」(B・G・I・L・P・R・X・Z)、そして「芸術教室中心型」(F・H・K・T・U・W)といえるタイプが見受けられる。「芸術教室中心型」は、多年度にわたって継続する芸術科目2科目以上を中心に受講する傾向が強い。

これらのリピーターのタイプに関しては、藤岡英雄も徳島大学公開講座の「固定受講者」分析において詳細に指摘している<sup>(22)</sup>。藤岡の「固定受講者」と本稿におけるリピーターの定義、また両大学の講座の内容も異なっていることから単純な比較はできないが、藤岡は、様々な分野、性格の科目を並行受講する「マルチ型」が、「固定受講者」の3割強を占めていることを指摘している<sup>(23)</sup>。この「マルチ型」と筑波大学公開講座における「多角型」が共通した特徴をもち、さらに今回提示したリピーターの中でもいちばん大きな割合を占めているのには、何らかの共通した傾向性が感じられる。また、「スポーツ教室単一科目型」と「スポー

表Ⅲ-3-1. 受講講座数別の人数\*  
(平成8, 10~12年度)

受講講座数	人数
9講座	1
8講座	2
7講座	3
6講座	15
5講座	18
4講座	50
3講座	144
2講座	432
1講座	2,432
総計	3,097

※筑波大学学務部学務第二課教育公開係蔵「受講許可証綴り(平成8年度, 10~12年度)」より作成

表Ⅲ-4-1. 5講座以上のリピーター\*の居住地分布表\*\*

つくば市内	天久保	1	旧桜村
	吾妻	2	
	梅園	1	
	並木	2	
	下広岡	1	
	竹園	2	
	旧谷田部町	春日	2
		松代	2
		谷田部	1
小計(人)	14		
つくば市外	荃崎町	3	10km圏
	土浦市	4	
	牛久市	1	20km圏
	下妻市	1	
	取手市	1	
	守谷町	1	
	竜ヶ崎市	1	30km圏
	関城町	1	
利根町	1		
小計(人)	14		

※表Ⅲ-3-1で示された5講座以上の受講者の中から学生を除いた受講者

※筑波大学学務部学務第二課教育公開係蔵  
受講許可証綴り(平成8年度, 10~12年度)より作成

「ツ教室中心型」, 「芸術教室中心型」は, 筑波大学が体育と芸術の専門学群を持つがゆえの特徴であるといえる。

#### IV. 今後の課題

筑波大学公開講座の受講者分析からリピーター層の存在が確認できた。今後は, このリピーター層がいかなる価値観や学習要求に基づいて受講科目を選択しているか等について, ライフヒストリー法をはじめとする質的な研究方法をもちいて詳細な分析をおこなう必要がある。そのことを解明することは, 成人学習者が公民館等の地域社会教育・生涯学習施設等が提供する事業とは異なる, 大学公開講

表Ⅲ-4-2. リピーター\*の受講講座内容\*\*

受講者	年度	講座名			
A (女性) 47歳	12	弓道 (春季)	G (女性) 41歳	8	陶芸 (中級)
	12	東西の古典に親しむ		12	心理療法入門講座
	11	弓道		11	生活の中のカウンセリング
	11	弓道 (秋季)		11	園芸教室 (花・野菜)
	10	弓道		10	クラシックバレエ
	10	弓道 (秋季)		10	こころの不思議
	10	インターネットとマルチメディア		8	子供の目・親の目
	8	弓道①		12	油絵 (中級)
B (男性) 61歳	8	陶芸 (初級)	H (女性) 46歳	12	日本画 (基本コース)
	12	園芸教室 (ブルーベリー)		11	油絵 (中級)
	11	つくば健康ウォーキング		11	塑像製作 (頭像)
	11	園芸教室 (ブルーベリー)		11	日本画 (基本コース)
	10	園芸教室 (ブルーベリー)		10	油絵 (初級)
	8	地球を視る, 地球を知る		12	弓道 (春季)
	8	エア・ライフル		11	塑像製作 (頭像)
	8	米作りと食べくらべ体験教室		I (男性) 61歳	11
8	油絵 (初級)	11	剣道 (秋季)		
12	弓道 (春季)	11	日本画 (応用コース)		
11	弓道	10	日本画 (基本コース)		
11	弓道 (秋季)	12	弓道 (春季)		
10	弓道 (秋季)	12	弓道 (秋季)		
10	クラシックバレエ	11	弓道		
8	弓道②	11	弓道 (秋季)		
C (女性) 31歳	8	妖かしの美学	J (女性) 48歳	10	弓道 (秋季)
	12	剣道 (春季)		12	陶芸 (上級)
	12	剣道 (秋季)		12	ネットワーク社会とインターネットの活用
	11	剣道 (秋季)		11	陶芸 (上級)
	11	剣道		10	陶芸 (上級)
	10	剣道		10	やさしい墨絵・基礎
	10	剣道 (秋季)		8	陶芸 (上級)
	8	剣道①		12	園芸教室 (花・野菜)
D (男性) 49歳	12	剣道 (春季)	L (男性) 67歳	12	園芸教室 (ブルーベリー)
	12	剣道 (秋季)		11	つくば健康ウォーキング
	11	剣道 (秋季)		11	園芸教室 (ブルーベリー)
	11	剣道		11	生活の中のカウンセリング
	10	剣道		11	園芸教室 (ブルーベリー)
	10	剣道 (秋季)		10	園芸教室 (ブルーベリー)
	8	剣道①		12	剣道 (春季)
	12	剣道 (春季)		M (男性) 48歳	12
12	剣道 (秋季)	11	剣道 (秋季)		
11	剣道	11	剣道		
11	剣道 (秋季)	10	剣道		
10	剣道	10	剣道 (秋季)		
10	剣道 (秋季)	12	ゴルフ (アドバンスドコース)		
8	剣道②	12	楽しく動いて心も体もリフレッシュ!		
12	陶芸 (初級)	O (女性)			
12	陶芸 (中級)				
11	園芸教室 (ブルーベリー)				
11	陶芸 (上級)				
10	園芸教室 (ブルーベリー)				
10	園芸教室 (ブルーベリー)				

38歳	11	ゴルフ(アドバンスドコース)	U(女性) 66歳	10	漢字書法
	10	ゴルフ(中級者)		8	塑造制作(頭像)
	10	ゴルフ(初心者)		8	陶芸(中級)
P(女性) 46歳	12	心理療法入門講座	W(女性) 43歳	8	日本書道史を見る
	12	臨床人間学 人間関係論		8	園芸教室
	11	生活の中のカウンセリング		12	陶芸(上級)
Q(女性) 41歳	10	こころの不思議	X(女性) 49歳	11	塑造制作(頭像)
	8	子供の目・親の目		11	陶芸(上級)
	12	弓道(春季)		10	陶芸(上級)
	11	弓道		8	陶芸(中級)
R(男性) 64歳	11	弓道(秋季)	Y(男性) 70歳	11	生活の中のカウンセリング
	10	弓道		11	臨床人間学
	10	弓道(秋季)		11	日本画(応用コース)
	12	ゴルフ(アドバンスドコース)		10	日本画(基本コース)
S(男性) 24歳	10	インターネットとマルチメディア	Z(女性) 28歳	10	映画にみる家族
	8	ゴルフ(アドバンスドコース)		12	ゴルフ(初心者)
	8	ゴルフ(一般初心者)		12	ゴルフ(アドバンスドコース)
	8	UNIXとインターネット		12	ゴルフ(初級者)
T(男性) 60歳	10	剣道(秋季)		12	ゴルフ(中級者)
	10	油絵(中級)		11	インターネットとマルチメディア
	10	剣道		11	剣道
	8	剣道①		11	生活の中のカウンセリング
	8	剣道②		11	臨床人間学
	12	油絵(初級)		10	科学折り紙 オリガミクス
	12	陶芸(初級)		10	こころの不思議
	11	陶芸(初級)			
	10	油絵(初級)			
	8	日本画			

※表Ⅲ-3-1で示された5講座以上の受講者の中から学生を除いた受講者

※※筑波大学学務部学務第二課教育公開係蔵  
受講許可証綴り(平成8年度, 10~12年度)より作成

座に期待する学習内容のレベル, 方法・形態がいかなるものであるかを明確にし, 学習者サイドからみた大学公開講座の役割を明らかにすることになる。

このことにかかわって, 実践的な課題としては, 大学開放センター, 生涯教育研究センター等の大学公開講座を実施する大学側が, 受講者の学習ニーズの質的分析を長期にわたり継続的におこなえるような体制をとる必要性を指摘したい。そうした研究成果をもとに, 大学公開講座の方法・形態の開発を図ることが生涯学習支援に於ける大学公開講座の独自の役割を明確にしていくことになると考えられる。

(担当: I・IV 手打, II・III 安藤)

## 註

- (1) 中央教育審議会答申(1971年)第1編第3章第2高等教育改革の基本構想 4「高等教育の開放と資格認定制度の必要」。
- (2) 中央教育審議会答申(1981年)第4章「成人期の教育」2「成人への学校教育の開放」。
- (3) 有本 章「大学改革の中の生涯学習」(『日本生涯教育学会年報』第16号)1995年 p.13。
- (4) 小野元之・香川正弘編著『広がる学び 開かれる大学』ミネルヴァ書房 1998年 p.20。
- (5) 文部省大学局編「大学資料」119・120号, p.65。
- (6) 学会誌についてみると,日本生涯教育学会年報 第9号『生涯学習社会と高等教育への期待』(1988年),同第16号特集「大学改革と生涯学習」(1995年),日本社会教育学会編『高等教育と生涯学習(日本の社会教育42集,1998年)』で,生涯学習論の観点から大学・高等教育について特集が組まれているが,そのなかに大学公開講座に関する研究も見られる。
- (7) 田中雅文「大学公開講座の動向—MKI データベースより—」(『日本生涯教育学会年報3』)1982年 p.223。
- (8) 前掲『生涯学習社会と高等教育への期待』。
- (9) 同上 p.25。
- (10) 同上 p.26。
- (11) 藤岡英雄「『継続学習者』と公開講座の機能—大学公開講座に関する若干の考察—」前掲『高等教育と生涯学習』p.126。
- (12) 同上 p.127。
- (13) 同上 p.129。
- (14) 住岡英毅「大学と地域社会」,前掲『高等教育と生涯学習』 p.80。
- (15) 筑波大学公開講座委員会編『1980年代の生活と開かれた大学—筑波大学の生涯教育へのこころみ』大蔵省印刷局 1982年 p.348。
- (16) 筑波大学『筑波大学の基本構想』1980年 p.1。
- (17) 同上 p.4。
- (18) 江口篤寿「『開かれた大学』と大学公開活動」(『つくばフォーラム』No12)1980年 p.3。
- (19) 同上 p.3。
- (20) 同上 p.348。
- (21) つくば市は,1987年に桜村,谷田部町,大穂町,豊里町が合併して誕生した。さらに翌1988年に筑波町も加わって現在に至る。2002年11月には稲敷郡荃崎町が合併される。
- (22) 藤岡英雄「公開講座受講者の研究(1)「固定受講者層」の形成とその特性」(『徳島大学開放実践センター紀要』第8巻)1997年 pp.32-35。
- (23) 同上 p.35。